

芭蕉も、そして今の私たちも

三年C組の国語の授業を参観しました。教材は、江戸時代に生きた松尾芭蕉の「奥の細道」。この日授業で扱っていたのは、鎌倉時代に東北地方で栄華を極めていた藤原氏と、兄（源頼朝）の圧力から逃れるために藤原氏を頼って逃げた源義経のゆかりの地、岩手県の平泉について書かれた部分でした。

藤原氏や義経が生きた時代から約五百年後に平泉を訪れた芭蕉は、涙を流しながらあの有名な句を詠んでいます。

夏草や兵（つはもの）どもが夢の跡

この句を生み出した当時の芭蕉の思いに迫るとというのが、授業のねらいでした。

私は感心しました。生徒たちは、芭蕉の書いた文章からそれを読み取ろうとしたり、以前得た知識を利用して芭蕉の思いに迫ろうとしたりしていました。今から三百年も前に生きた作者に迫ることが古典のおもしろさの一つです。生徒たちがそれに前向きに取り組んでいたことに、私はうれしくなりました。

しかし、あることが頭をよぎりました。「生徒たちの発言を聞くと、確かに芭蕉の思いに迫っている。でも、彼らは頭の中で理解しただけではないだろうか。」

「芭蕉という特別な人物だから感じることだ」と考えている生徒がいたら、本当の芭蕉の人間性や感動に迫り切れていないと私は思いました。生きた時代は違いますが、芭蕉も私たちも同じ人間です。人間だから感じることは共通しているのではないのでしょうか。

旧瑞陵中、旧日吉中、旧釜戸中は過去のものとなりました。旧瑞陵中に至っては、芭蕉が平泉で見たものと同じく、残っているのは「自然」と「跡」。ここで学んだ多くの生徒の姿が心の中に蘇ってきます。旧釜戸中については、形こそ残っているものの、グラウンド周りには雑草が生え、校舎も薄汚れていて殺伐（さつぱつ）としています。形が残っている分、「しんみり」というより「切ない」と思っています。

平泉での芭蕉の思いに近いものを、私たちは今も感じることができます。したがって、芭蕉は特別な感覚を持っているというより、感覚が私たちより鋭いといった方がよいのかもしれない。

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家

旅に出る芭蕉が、人に譲った江戸深川の自分の家について詠んだ句です。住む人が替わると雰囲気が変わるといこの歌は、まさしく旧日吉中です。小学生が使うようになった校舎は、以前とは違う雰囲気になっ言えるでしょう。（十二月十一日 記）



ここに旧瑞陵中はあったのです。